

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)留学結果報告書

長いようで短かった10ヶ月間のアメリカ留学もついに終わりを迎えた。振り返ってみると、多くの苦労があったものの自然の豊かケンタッキーの良い環境の中で勉学に打ち込むことができ、またよい友人などに恵まれ、これまでにない体験をすることができた貴重な10ヶ月間であった。このかけがえのない10ヶ月間で学んだことを生活面、学業面、語学面の3つを柱に述べていく。

生活面

(1) アメリカ・ケンタッキー州

私が留学したアメリカのケンタッキー州はアメリカの中央かつ東に位置し、競馬とバーボンの産地として有名な州である。馬とバーボンが有名ということもあり、大きな都市というよりは牧草地が広がる自然豊かな場所である。公共交通機関などはあまり発達しておらず、基本的に車がないと生活が困難である場所でもある。私が在学したイースタン・ケンタッキー大学はリッチモンドという比較的小さな町に所在していたため、買い物や出かける際は友人もしくはホストファミリーに車をお願いすることがほとんどだった。生活するなかで多くの不便を感じたが、同時に自然が豊かで落ち着いた空間は勉学により適していたと感じる。また、現地学生の助けを必要とする環境は、多くの現地の友人を作り、よりローカルな体験をすることを可能にしたと感じる。アメリカというと、多く人はロサンゼルスやニューヨークといった大きな街ばかりを想像するが、ケンタッキーのような田舎で自然豊かな場所はアメリカの特有の文化が残っており、より伝統的で本質的なアメリカ文化を知るのに適した場所であったと感じる。

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)留学結果報告書



ハイキングをした時の様子。このようにケンタッキー州は自然豊かな州である。

(2) クリスチャンの人たち

アメリカの伝統的で本質的な文化として宗教が挙げられる。歴史を振り返ってみると、アメリカという国を作った人たちはヨーロッパから来たキリスト教徒の人たちであり、その宗教と伝統がケンタッキー州のリッチモンドでは根強く残っていると感じた。初めてリッチモンドに来て感じたことは、教会とキリスト教信者の多さである。実際、私がお世話になったホストファミリーも熱心なキリスト教信者であり、毎週日曜日に欠かさず教会に行き、また食事の前のお祈りも欠かさずしていた。私の友人の何人かも熱心な信者であった。彼らの場合、日曜日に教会に行くことはもちろんだが、そのほかにも学生が主体となってキリスト教信者のコミュニティを立ち上げて活動したり、個人で集まって聖書の勉強をしたりと日本ではあまり見られない宗教的活動が多く見られた。信者でない人たちも信者の人たちの活動を尊重しており、宗教に対して非常に寛容であると感じた。これまで宗教に関して深く考える機会がほとんどなかったが、留学の中で宗教が人々の生活の中に身近に存在していると強く感じた。日本では感じるこのできない感覚であり、日本とアメリカとの大きな文化の違いのひとつであると考えている。



このような教会がたくさん見られた。

(3) アメリカでの寮生活

アメリカの学生の多くは、アパートでルームシェアをするか大学の提供する寮に入ることがほとんどである。イースタン・ケンタッキー大学の場合、最初の2年間は大学内のキャンパスにある寮に住むことが義務付けられている。私が滞在したテルフォードホールでは二人の学生がひとつの部屋を共有し、2つの部屋の間にはトイレとシャワールームがあるスイートルームと言われるタイプの寮であった。このタイプの寮はアメリカでは一般的で逆に一人がひとつの部屋に住むことの方が稀である。私はアメリカ人のルームメイトと10ヶ月間を共に過ごした。日本とは違うこの生活様式に最初は戸惑いがあったが、現地学生と常にとともに過ごすことはもっとも良い経験のひとつにもなった。毎日の中で文化の違いを感じることができ、自身の英語力の向上の大きな要因にもなった。また、寮が主催するイベントも多数あり、そのイベントを通して新しい友人を作ることにもできた。

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)留学結果報告書



入寮当日に撮影したもの。反対側にも同じベッドと机が付いている。



このトイレと隣にあるシャワールームを4人で、使用した。ドアは隣に住んでいる学生の部屋に続いている

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)留学結果報告書



テルフォードホールでのイベントの様子

学業面

今回の留学では専攻である教育を含めたさまざまな授業を取り、現地学生と共に学ぶことができた。それらの中でも特に、アメリカの教育理解、世界史そして人類文化学の授業において多くことを学ぶことができた。

(1) アメリカの教育理解

この授業では、教育の基本的知識を学ぶのと同時に観察実習を通してアメリカの教育がどのようなものであるかを学ぶことができた。講義では、毎回実際にアメリカで問題になった教育問題についてディスカッションを行ったりして教師としてどう振舞うかを学んだり、教員として知っておかなければならない重要な専門知識を学んだりした。ディスカッションでは、アメリカ特有の教育にトピックに関して現地の学生の興味深い意見を聞くことができ、また日本でよくある教育問題に関して日本人以外の意見を聞くことができ非常に参考になった。授業で紹介された専門知識はこれまでに日本の大学で習ったものと多くが重なっており、教師として目指す資質と能力は日本もアメリカも変わらないと感じた。10時間の観察実習では、小中高の3つの学年すべてを観察することができ、また高校の外国語の授業(スペイン語)も観察できた。小学校、中学校の観察実習では、子どもたちがすでに自分のパソコンを使って学習する

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)留学結果報告書

姿が見られ情報機器の積極的な導入が見られた。高校の外国語授業では、まず教師の語学力の高さが目立ち、同時に、日本の外国語授業に比べて、より実践に重きが置かれていた。例えば、習った新しい文法表現を使って授業内で練習する機会が多くあり、教師と生徒とのスペイン語でのやりとりもたくさんあった。語学力向上のためには、ただ表現を覚えるだけじゃなくそれを使って練習することがより大切であり、その意味で観察したスペイン語の授業では、生徒が習った表現を使う実践の機会が多く設けられていた。また、外国語の授業にかけられている時間にも違いがあり、私が観察した授業は毎日90分行われており、日本の高校の英語の授業より長い時間をかけて教えられていた。この授業を通して多くのアメリカ教育の特色と現場の様子を知ることができ、また、日本の教育についても振り返ることができた。

(2) 世界史

この授業では、世界の歴史に関する知識だけではなく、教師としてどのように教えるべきかを考えさせられる有効的な授業だった。この授業では、予習の段階で歴史的事実は確認することが求められ、授業では予習で学んだことをもとに当時の国々の様子や人々の考えを考察するというものであった。そのため、授業では、教授が学生に対して効果的な質問を行い、教授とのやりとりを通してより深い内容を学ぶことが実現されていた。これは、日本の教育が目指す主体的・対話的で深い学びであり、それが効果的に行われていたと感じる。特に、社会・資本・共産主義の違いを取り扱った際の授業では、その教授は現代社会の問題を例に挙げつつ、学生とのやり取りとディスカッションを通して複雑な経済体系の違いをわかりやすく説明した。その結果、学生全員がその教授に拍手を送るということがあった。ただ単に知識を覚えるのではなく、教師とのやりとりを通じて「なぜ」、「どうして」を考えながら学ぶことの楽しさをこの授業で体感したとともに、それが主体的で対話的な授業をする上で大切だと強く感じることもできた。

(3) 人類文化学

この授業では今まで人間がどのように進化し、どのように社会を形成してきたかを学んだ。最終課題として人類文化に関するトピックを選び、そのトピックについてインタビューを通して分析をした。私は日本人にあまりなじみのない「キリスト教」をトピックに設定し、分析をした。インタビューを通して、Christian(キリスト教信者)とは、聖書を読んで内容を理解することで、神の正しい行いを学びそれを実践していくことが人生の目的であるということがわかった。彼らにとって、困った人を助けることや仲間を増やすことも正しい行いであり、それをする事で天国に行くことができるという考えを持っている。多くの Christian

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)留学結果報告書

が留学生を助けようとしたり、未だに布教活動をしたりするのはこのためであり、またアメリカは罪の文化といわれるがそれはキリスト教が深く関わっているのではないかと感じた。この最終課題を通して、キリスト教という馴染みのない文化について深く知ることができたと考える。

語学面

(1) 語学習得の難しさ

英語力の向上が私の留学の大きな目的の1つであった。留学中は、なるべく現地学生と一緒に過ごすようにしたり、新しく出会った英語表現をメモして寝る前に覚えたりするなどの努力をした。10ヶ月間の留学で自身の英語力の劇的な向上を期待していたが、実際には流暢に話すことはいまだに困難であるし、理解できない英語もたくさんあるというのが現状である。留学をすれば、母国語話者のように英語を話せるようになるという考えがよくあるがそれは大きな間違いであると感じた。言語の習得は想像以上に長い時間がかかるということはこの留学で痛感した。

(2) 簡単な表現を使いこなすこと

アメリカの大学で現地学生と授業を共にするには、高い英語力が必要だしそのための英語力を身につけることは長い時間がかかる。しかし、決して完璧な英語を目指す必要はないと感じた。例えば、サウジアラビアから来た私のクラスメイトは一見すると流暢に英語を話しているように見えるが、実際は文法的に間違っていたり、発音が正しくなかったりすることが多かった。さらに驚いたことに、彼は英会話に問題がないにも関わらず、小文字のアルファベットを書く事ができなかった。このように英語が完璧でなくても、アメリカの大学で勉強している学生はたくさんいるということがわかった。決して、完璧で高度な英語を話す必要はなく、むしろ簡単な表現を使いこなせるようにしてわからない単語などは言い換えて説明をするようにすることがより大切であると感じた。日本人の多くは、日本語をそのまま訳したような完璧な英語を話そうとするために会話の途中で詰まってしまうたり、細かい間違いを気にして話すことためらったりしてしまうと考える。中学校、高校で習った基本的な英語を使いこなせるようにすれば、多くのことを英語で表すことが可能であり、高度な英語表現は必ずしも必要ではないと感じる。

(3) 英語は日本語を訳したものではないということ

この留学を通して、単に英語力の向上することが出来たというよりも、英語と日本語の言語体系の違いを理解しより自然な英語を使いこなせるようになったことが1番の収穫であったと感じる。例えば、「足が痺れている」という日本語を直訳すると "My legs are paralyzed." となるが意味は全く異なる。"My legs are paralyzed." という足が何らかの重い病気を

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)留学結果報告書

かけがで麻痺して動かさないという意味になってしまう。日本語の「足が痺れている」を表したい場合、英語では”My legs are sleeping”と表現する。このように必ずしも言語が対応しないことが留学を通して感覚的に身に付いたと感じる。

英語と日本語は全く違う言語であり、英語を使いこなせるようになるには、ただ英語表現を覚えるのではなく英語の独特の言語体系にも慣れる必要があると考える。海外ドラマを見たり、実際に留学生と日頃から英語で会話をしたりすることで英語の言語体系慣れ、より英語らしい英語を使用することができると思う。子どもたちがより英語らしい英語を身につけられるよう留学を通して得られたこの感覚を英語教育に生かしていきたいと考える。